

ポルトガル語の直説法未来と過去未来の非直説法性についての考察

鳥越慎太郎

1. 序論

本稿ではポルトガル語文法において伝統的に「直説法未来」と「直説法過去未来」と呼ばれる動詞形態の機能の非直説法性について考察する。前半では両形式の叙法的位置付けをめぐる文法史と近年の叙法・法性研究のレビューを通して考察を展開していく。後半ではスペイン語文法においてそれらを非直説法叙法体系と仮定した出口 (1980, 1986) の推定法 (*Presumptive Mood*) 案について再評価を試みる。なお、中立的立場のため引用などを除いて先行研究に従い直説法過去未来や条件法と呼ばれる形式を「-ria 形」、直説法未来を「-rá 形」と呼び、その他の呼称は括弧つきで扱う。また、本稿ではポルトガル語とスペイン語の当該項目を同等とみなし、スペイン語文法における先行研究を多く扱っていることをあらかじめ注釈する。

2. 背景

2.1. -ria 形をめぐる議論

Resnick (1984)、西川 (1988)、Castronovo (1989)、秦 (1994) のレビューによると、スペイン語文法において-ria 形は Nebrija (1492) 以来長らく「接続法」として扱われていたが、Salvá (1830)¹⁾ によって「直説法条件未来」とされて以降、直説法に属するのかが、非直説法（「条件法」、Ramsey 1898¹⁾；「可能法」、Keniston 1937¹⁾；「接続法」、Rallides 1971¹⁾）に属するのかが争点となった。Bello (1847)¹⁾ は従属節で用いられる際に共起する主節動詞の語彙 (saber, afirmar, etc.) を裏付けとして-ria 形を直説法の時制として扱い、また Gili Gaya (1973)¹⁾ はこれに加え「条件下での事実」を-ria 形の中心的意味と解釈し、法的用法は派生表現とした。後に Real Academia Española (1973)¹⁾ で直説法として扱われると、以降-ria 形は直説法として落ち着いた。

ポルトガル語文法では-ria 形は Barros (1540) で「接続法」、それ以降の確認できるものでは「条件法」とされているが、ブラジルでは 1960 年代に文法呼称法で「直説法過去未来」と定められて以降こちらが定着し (Cunha & Cintra 2007)、日本のポルトガル語学でもこれに分類されるのが一般的である。

2.2. -rá 形をめぐる議論

スペイン語、ポルトガル語のいずれの文法においても、それぞれ Nebrija (1492)、Fernão de Oliveira (1536) 以来現代に至るまで-rá 形は「直説法未来」として定着している。スペイン語では Criado de Val (1972)、Alarcos Llorach (1994) など、ポルトガル語では Fátima Oliveira (1985) などが-rá 形の法的性格を指摘しているが、スペイン語での-ria 形のような議論には発展していない模様である。

一方、一般言語学における意味論の分野では Lyons (1977)、Comrie (1985)、Bybee et al. (1994)、Palmer (1986, 2001) などによって、「未来時制」が法的性格を伴わない純粹な時間概念でありえるのかが疑われている。ただしこれらも「直説法未来」を直説法として扱うことについての議論にまでは及んでいない。

3. -rá 形、-ria 形の非直説法性

以上のとおり、現代文法では実質的に-rá 形、-ria 形を「直説法未来」、「直説法過去未来」と直説法として扱う傾向が強い。しかし、Bello などの統語構造や共起語彙を根拠とする説明は両形式の「直説法性」の積極的な説明ではなく、消極的立場から「非接続法性」を説明しているにすぎないのではないだろうか。

そこで直説法とは何かを改めて確認する。叙法とは話し手の事柄に対する心的態度 (モダリティ) を表現する動詞形態である (Jespersen 1924, Palmer 1986)。近年の類型論的・意味論的アプローチからの研究では叙法対立を *realis* と *irrealis*²⁾ という上位概念を用いて説明している (Bybee et al. 1994, Givón 1994, Palmer 2001, 和佐 2004, etc.)。Mithun (1999) による、*realis* は「直接的な知覚によってわかる実現された、起こった、あるいは実際に起こっている状況」を、*irrealis* は「観念の領域のもので想像によってのみわかる状況を」描写するとする定義を受け、Palmer (2001) は直説法を *realis* の標識のひとつであるとしている。

モダリティの意味分類については研究者によって呼称や枠組みが異なるところもあるが、可能性や疑念など真偽判断に関する *Epistemic Modality* と指示や許可、願望など未実現の事象に関する *Deontic Modality*、感情や譲歩 (前提: *Presupposition*) に大きく分類される。これを踏まえ「直説法未来」と「直説法過去未来 (条件法)」の用法をポルトガル語の各文法書 (Bechara 2007, Cunha & Cintra 2007, Mateus et al. 2003, Perini 2002) からまとめ、それらに Givón (1994) と Palmer (2001) のモダリティの意味分類を、例文を参考に当てはめて併記した(表 1,2)。

Cunha & Cintra (2007: ポルトガル語) や Castronovo (1989: スペイン語) は-ria 形を「直説法過去未来」とする根拠として「事実を述べる直説法未来」と時制的対応関係があることを利用している。確かに、1 と 1' がモダリティの意味を介さない客観的な時間指示ととらえられる可能性は否定できない (Resnick 1984,

表 1 「直説法未来」の用法

用法	Givón (1994)	Palmer (2001)
1. 発話時以降に起こる行動や事実	low certainty	future
2. 現在における不確かさ、推測	low certainty	deductive/assumptive
3. 丁寧の表現	epistemic anxiety	modification
4. 願望、命令	weak manipulation	directive/jussive
5. 条件下における可能性	low certainty	assumptive/future condition

表 2 「直説法過去未来」の用法

用法	Givón (1994)	Palmer (2001)
1'. 言及されている時点以降に起こる行動や事実	low certainty	future
2'. 過去における不確かさ、推測	low certainty	deductive/assumptive
3'. 丁寧の表現 (主に願望)	preference/epistemic anxiety	modification
4'. 疑問文や感嘆文において) 驚き、憤り	preference	presupposition
5'. 条件下における事象、非現実	lower certainty	unreal condition

Comrie 1985)。しかし未来時そのものが直接的な経験の外の領域 (irrealis) である (Givón 1994, Langacker 1991) と考えられ、これに基づいて表 1 と表 2 の各用法から、-rá 形と-ria 形は総合的にモダリティを表現する動詞形態であり、realis の標識としての直説法と対立する irrealis の標識のひとつであると考えることが妥当ではないかと考察する。また、Bull (1960)¹⁾ や Gili Gaya (1973)¹⁾、和佐 (2004)³⁾ は法的用法を本来的な時制用法からの転位的な用法としているが、法的用法が現代語において-rá 形-ria 形の主たる姿なのか、転位的なものにすぎないのかについては実際の言語使用の実態から明らかにしていくべきであるだろう。

4. 出口の推定法

スペイン語文法において-rá 形-ria 形を非直説法叙法として扱う主張はいくつか見られるが (e.g. Alarcos Llorach 1994)、中でも論理的に体系化を試みた事例のひとつとして出口 (1980, 1986) の「推定法 (Presumptive Mood)」が挙げられる。しかし、これについて批評、評価を下している研究は確認できない。そこで以降では推定法を、ポルトガル語への応用の可能性も考慮しながら再考していく。

推定法は、まず-rá 形の未来時制としての機能を疑い、-rá 形と-ria 形の直説法性を否定し、それらを接続法との中間的な叙法体系の 2 時制として扱う仮説理論である。以降に推定法を支える下位理論を引用して簡潔にまとめていく。

4.1. 同格化された時制と法: 「法時制」から「法と時制」へ

出口 (1986) はまず、旧来の樹形図的分類により「XX 法 YY 時制」と時制が叙法の下位範疇となっている点について、叙法の違いを越えた時制間の共通性が見出されにくい点を批判した。例えば直説法現在と接続法現在はそれぞれ直説法と接続法の下位範疇で樹形図の末端部分にあり、この場合それぞれに共通する「現在」時制の同等性が保障されていない。そこで法と時制をマトリックスにまとめることで両概念を対等に扱い、叙法間の時制の同等性の可視化し、次節の 3 法 2 時制理論への手がかりとしている。

4.2. 3 法 2 時制: 過去と非過去

出口は次に各法・時制形態の時間指示を例示し、直説法現在と「直説法未来」はそれぞれが現在と未来を指示するのではなく非過去時を共有すること (cf. Comrie 1985)、「直説法未来」と時制で対立するのは直説法現在ではなく「直説法条件」(-ria 形) であること、及び直説法現在と「直説法未来」、直説法過去と「直説法条件」がそれぞれ法性で対立することを示した。これらを踏まえ、「直説法未来」と「直説法条件」を直説法から独立した「推定法」の非過去時制と過去時制として法・時制マトリックスにあてはめた (図 1)。

時制 / 法	直説法	推定法	接続法
非過去	AMO	AMARÉ	AME
過去	AMABA/AMÉ	AMARÍA	AMARA/AMASE

図 1. 3 法 2 時制 (出口 1986)

4.3. 叙法体系 (陰否性) の中の推定法

出口 (1981) は Terrell & Hooper (1974) の *assertion / non-assertion* に基づいた叙法理論を批判し、それに対する独自の叙法理論として「陰否性理論」を提唱した。命題が真である場合及び命題を全面的に否定する場合は直説法、その中間に位置する「陰否性 (否定的態度)」を表す場合は接続法という連続体理論である。出口 (1986) では推定法も陰否性に組み込み、「直説法ほど真偽が断定的でなく同時に接続法ほど陰否的でないというその中間的な法性」と定義している。

5. 推定法の修正すべき点

推定法は提唱後、特に理論の補足や見直しなどがなされていないが (出口 1997)、いくつかの問題点が挙げられる。紙幅の都合上踏み込んだ議論には至れないが、以下に問題点とその修正の方向性を提示する。

まず出口 (1986) では法的な意味対立を根拠に推定法を直説法から独立させているが、同論は時制的側面からの説明に力を入れており、法的意味の側面からの説明については法動詞表現の例文を挙げて比較するのみにとどまっている。

次に出口 (1982, 1986) では推定法を陰否性の連続体モデルに押し込み、直説法と接続法の意味的な中間法として扱っている。しかし、推定法と接続法の関係はその法的意味の強弱に基づいたものなのだろうか。直接的な比較は難しいが、例えば感情や譲歩など命題は事実であるが接続法が用いられる前提表現の法的意味が、-ria 形による反実仮想表現の帰結よりも強いという積極的な根拠はない。筆者は接続法と推定法の差異こそ、-ria 形の議論で直説法支持派が用いたような統語的な「棲み分け」にあるのではないかと考える。例えば出口 (1982) はコーパス分析により接続法は主節と従属節で広く現れ⁴⁾、推定法は主節に多く現れる傾向を量的に示しているが、これについて質的調査を併せてより明らかにしていくことが課題である。

また、出口 (1986) の 3 法 2 時制では現代スペイン語において接続法現在に置き換わっているとされる接続法未来の存在は考慮されていない。しかし、現代でも接続法未来が口語、文語ともに頻繁に用いられるポルトガル語で推定法を想定する場合、3 法 2 時制における接続法未来の位置づけも考慮しなければならない。接続法未来の存在によって不均衡が生じてしまうからである。Comrie & Holmback (1984)、坂東 (1994)、Maeda (2004) からまとめると、1) 接続法未来と接続法現在とはともに非過去の時間指示を共有していること、2) 接続法未来は用いられる表現がごく限られること、3) 両形式が共存する限られた表現においても、指示対象や指示時間の特定性 (*definiteness*) の有無によって意味的な差異が生じて使い分けられることが指摘されている。すなわち、両形式は同じ時間指示を共有しつつ、使い分けがなされていることから、法・時制マトリックスには接続法非過去の 2 形式としてまとめられ、3 法 2 時制の均衡を保つことができると考える。

6. 推定法の今後の課題

5 では推定法の修正すべき点を挙げたが、さらに困難な問題も残る。例を挙げると、丁寧の表現や反実仮想表現の帰結節において、特にヨーロッパのポルトガル語では -ria 形の代わりに直説法未完了過去が多く用

いられるが (Mateus et al. 2003)、この場合、形態的には直説法未完了過去でも機能的には推定法ではないかという問題が生じる。また、3法2時制では時制を持たない命令法が考慮されていないことも挙げられる。

7. 結び

本稿では「直説法未来」と「直説法過去未来」の非直説法性と、それに対する具体的な提案事例としての推定法についてのレビュー及び考察をした。未来が時間概念なのか法概念なのかという議論や-ria形の所属をめぐる議論には歴史があり、これらへの評価は研究者の背景となる言語観に大きく影響され、言語学の領域を超える哲学的な問題になりえることは承知している。

筆者がこの議論に関心を持つのは第2言語としてのポルトガル語習得の観点からである。経験的に学習者言語では接続法と-rá形/-ria形との混同が多く見られ、学習者も-rá形と-ria形に法的価値を感じていると考えられる。学習者の叙法選択や習得を把握するには直説法と接続法の区分のみならず、-rá形/-ria形、命令法や法動詞とその習得についての更なる理解が必要であり、また、学習者が叙法体系を習得するためにも彼ら自身による法概念、法体系に対するメタ言語的な理解が有効であると考えられる。現在までに成し遂げられている叙法習得研究において接続法以外の法体系まで考慮に入れているものはあまり見られない。推定法のように-rá形/-ria形を叙法としてとらえる、近年では稀になってしまったアプローチが、学習者の叙法習得及びその研究への新たな、かつ重要な手掛かりとなることを期待して引き続き注目していきたい。

注

本稿は日本ロマンス語学会第47回大会(2009年5月31日、於北海道大学)並びに東京外国語大学の学内研究会で発表された内容と、発表後の質疑応答などの内容をもとに加筆、修正を加えたものである。貴重なご意見、ご助言をいただいた秦隆昌先生、寺崎英樹先生、牧野真也先生、風間伸次郎先生にお礼申し上げますとともに、本論の内容に関する責任はすべて筆者のものであることを付け加える。

¹⁾ 各レビューより引用。

²⁾ Palmerはrealis/irrealisと頭文字を小文字で表記する場合は概念を、Realis/Irrealisと大文字で表記する場合は北米先住民諸語などにおける文法的標識(叙法)を表すように区別しており、本稿でもこれに倣う。

³⁾ 転位用法としての直説法未来がirrealis/「非断定」と分類している。

⁴⁾ ただし、ここで出口は接続法と命令法を区別していないため、実際は従属節に多く現れる傾向が示されると推測する。

参考文献

- Alarcos Llorach, E. (1994). *Gramática de la Lengua Española*. Madrid: Espasa Calpe.
- Barros, J. de. (1540). Gramática da Língua Portuguesa. In J. de Barros. (1971). *Gramática da Língua Portuguesa*. Lisboa: FLUL.
- Bechara, E. (2007) *Moderna Gramática Portuguesa: 38ª edição Revista e Ampliada*. Rio de Janeiro: Editora Lucerna.
- Bybee, J.; Perkins, R.; and Pagliuca, W. (1994). *The Evolution of Grammar – Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the*

- World*. Chicago: the University of Chicago Press.
- Castronovo, B. J. (1989). The Strange History of *-ría* Form. *Hispania* 72, 378-384.
- Comrie, B. (1985). *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, B.; and Holmback, H. (1984). The Future Subjunctive in Portuguese: a Problem in Semantic Theory. *Lingua* 63, 213-253.
- Criado de Val, M. (1973). *Gramática Española; y Comentario de Textos: 5ª Edición*. Madrid: Editorial S. A. E. T. A.
- Cunha, C.; e Cintra, L. F. L. (2007). *Nova Gramática do Português Contemporâneo*. Rio de Janeiro: Lexikon.
- Givón, T. (1994). Irealis and the Subjunctive. *Studies in Language* 18(2), 265-337.
- Jespersen, O. (1924). *The Philosophy of Grammar*. London: Allen and Unwin.
- Langacker, R. W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar; Volume II*. Stanford, CA: Stanford University Press
- Lyons, J. (1977). *Semantics; vol. 2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Maeda, K. (2004). Três Fatores Cognitivos Determinantes do Subjuntivo em Português: Incerteza, Contraste e Julgamento de Positivo vs. Negativo. In *ANAIIS XXXIV (2001)*, 47-65. Associação Japonesa de Estudos Luso-Brasileiros.
- Mateus, M. H. M.; Brito, A. M.; Duarte, I.; e Faria, I. H. (2003). *Gramática da Língua Portuguesa*. Lisboa: Caminho.
- Mithun, M. (1999). *The Languages of Native North America*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Oliveira, Fátima. (1985). O Futuro em Português: Alguns Aspectos Temporais e/ou Modais. *Actas; 1º Encontro Nacional da Associação Portuguesa da Linguística*, 353-374.
- Oliveira, Fernão de. (1536). Gramática da Linguagem Portuguesa. in Fernão de Oliveira (2000). *Gramática da Linguagem Portuguesa (1536): Edição Crítica, Semidiplomática e Anastática*. Lisboa: Academia das Ciências de Lisboa.
- Palmer, F. R. (1986). *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, F. R. (2001). *Mood and Modality: Second Edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Perini, M. A. (2002). *Modern Portuguese A Reference Grammar*. Yale University Press.
- Resnick, M. C. (1984). Spanish Verb Tenses: Their Names and Meanings. *Hispania* 67, 92-99.
- Terrell, T. D.; and Hooper, J. (1974). A Semantically Based Analysis of Mood in Spanish. *Hispania* 57, 484-494.
- 出口厚実 (1980). ムードとモード：スペイン語における法制をめぐって. *Estudios Hispánicos vol.7*, 59-71.
- 出口厚実 (1981). 接続法と陰否性：スペイン語叙法分析の一視点. 『大阪外国語大学学報 第52号』, 19-37.
- 出口厚実 (1982). スペイン語における叙法と法制. 『大阪外国語大学学報 第56号』, 1-16.
- 出口厚実 (1986). スペイン語に「未来」はあるか？同格化された法・時制概念をめざして. *Estudios Hispánicos vol.12*, 1-10.
- 出口厚実 (1997). 『スペイン語学入門』. 東京: 大学書林.
- 西川喬 (1988). 『スペイン語時制研究史 (1492-1870)』. 神戸市外国語大学外国語研究所.
- 秦隆昌 (1994). スペイン語の「条件法」相当語形のいくつかの問題について. 『ロマンス語研究 27』, 17-24.
- 坂東照啓 (1993). ポルトガル語の接続法未来に関する基礎的研究. 『ロマンス語研究 26』, 149-160.
- 和佐敦子 (2004). 『スペイン語と日本語のモダリティ: 叙法とモダリティの接点』. 東京: くろしお出版.